

## ＜書評＞

書名：太平洋大戦：日米会戦（1931～1933年）という歴史

著者：ヘクター・C・バイウォーター

出版社：ヒュートン・ミフリン社（1925年）

再版：セント・マーティン印刷社（1991年）

書評者：デイヴィッド・リー

「しかし、その瞬間、太平洋の水平線には雲がほとんどない」

—バイウォーターの日米関係の評価

イギリス生まれのアメリカ人ジャーナリスト、作家そしてスパイだったヘクター・バイウォーターが書いた太平洋大戦を「予言的」であり、大日本帝国の1941年のアメリカ真珠湾海軍基地への攻撃を「正確に予言した」として、賞賛する人々がいる。他方、更に極端に、大日本帝国海軍は、バイウォーターの著作を彼らの「我が闘争」として信奉し、それをアメリカに対する将来の侵略戦争に取り入れようとしたと主張するものさえいる。

バイウォーターは、海軍事情に関する執筆を専門としていた。バイウォーターは、大日本帝国と米国の海軍戦略に関する著作の中の一冊のある章を発展させて、太平洋大戦を書いた。これは、三人称で、架空の三年間にわたる日米海戦を、彼が知っている1925年以前の海軍技術に基づき、また彼が理解する現代の地政学に基づいて書いたフィクションである。彼は1940年に没し、眞の日米間の太平洋戦争が現実に進行していくのを目にすることができなかった。

彼の熱狂的なファンによれば、バイウォーターの本は、海軍戦略の魔法の源泉である。バイウォーターの熱狂者達は、本著太平洋大戦は、日本によって、対米戦争の青写真として利用されたと主張している。他方、第二次世界大戦以前の日本の海軍の計画や作戦について知っていた人達は、そのような見解を支持する根拠は何もないと述べている。実際、日本軍の海軍将官達が、英語で書かれた架空の小説に完全に依存して、海軍の戦術・戦略を立てたと信じることは、恥知らずに日本人の能力を奪うことになるのであるが—おそらくこれが彼らの根底にある動機であろう。<sup>1</sup> バイウォーターの本が青写真の役割をしたという主張は同時に日本の海軍将校達は戦争を戦う能力がないというとんでもない印象を与えるものである。1920年に遡ってみると、バイウォーターの日本人の印象は「日本人は

---

<sup>1</sup> DC エバンス、MR ピアッティー共著。 海軍。 メリーランド州アナポリス、米国海軍協会出版。

物まねが得意で、気質は技術的ではない。」西洋人の日本人に対する評価に関しては、バイウォーターの本以降、何も変わっていないようである。

バイウォーターの応援団はまた、次のように言う。米国の軍事立案者達もまた侵略的日本に対抗する米軍のありうる戦略であるオレンジ計画を完全に太平洋大戦に基づいて立案していたという点において、アメリカの戦争計画者もまた、工夫に富むとは言い難い。<sup>2</sup>

熱狂的な賞賛の下に、バイウォーターのファン達は、気ままに次のような指摘をする。バイウォーターが見落とした「予測」がたくさんある。例えば、航空母艦による、主要海軍船舶としての主力艦の衰退、日本の商船を無力化する米国潜水艦の基本的役割、日本の軍事、外交、商業船舶の暗号通信の解読などである。バイウォーターは航空技術における大きな変化も見逃していた。例えば、1940年代の長距離大型爆撃機、これは日本の軍事および産業の生産力を弱体化すると同時に、日本の社会的団結を破壊するのに極めて重要な役割を果たした。<sup>3</sup>

太平洋大戦は、日米海軍の間の華々しい戦闘で溢れている。他方、技術的革新、例えば暗号解読とか、通信やレーダーといった海軍技術におけるアメリカの得意技についてはほとんど書かれていません。バイウォーターはまた同時に、日本軍の華々しい唯一の潜水艦や航空母艦からの航空機（飛ぶ「機械」）による米国太平洋岸への攻撃、日本の商用蒸気船によるパナマ運河の攻撃、これによってパナマ運河は数か月間通行不能になったことなどを盛り込んでいる。不思議なことに、アジアの植民地が日本の脅威の下にあるにもかかわらず、ヨーロッパは、バイウォーターの描く戦争に全く関与していない。<sup>4</sup> これらの海戦や日本軍のサンフランシスコ空爆が史実に基づいたものかは、専門家が検証できる。バイウォーターの戦争の最後は、1930年代初頭の設定としても非常に非現実的であるが、こちらも専門家による検証に委ねられる。

日米戦争というバイウォーターのテクノスリラーは、魔法の青写真というよりはむしろ単に彼の時代と彼自身の個人的偏見であり、浅薄な西洋中心の知識を反映したものである。

しかし、注目に値する少なくとも二点がバイウォーターの架空の戦争にはある。一つは、

---

<sup>2</sup> E S ミラー（1991年）。オレンジ戦争計画。メリーランド州アナポリス：米国海軍協会出版。

<sup>3</sup> 米国戦略爆撃の研究。（1947年）。戦略的爆撃の日本人の戦意に与える影響。

<sup>4</sup> <https://www.usni.org/magazines/naval-history-magazine/2014/december/americas-undersea-warshipping>

アメリカに対する日本の戦争の裏にある彼が虚構した理由である。二つ目は、この本のハイの日系アメリカ人の取り扱い方である。バイウォーターは、日本人がアメリカ人に対して暴動を起こすと予見している。

バイウォーターの戦前の日本の描写は本質的には辛らつで漫画的であるが、それはそれとして、その目的を果たしている。つまり、戦前の日本に関して、1920年代および近代的な考え方を反映しているのだ。バイウォーターの日本において「軍首脳部」が「トップに君臨する」。その時代と、日本が天然資源に乏しいことを考慮すると、日本が日本国民を食べさせ、産業を動かすためには海外の植民地主義に向かうことは必然であった。バイウォーターが描く戦前の日本は、全く利己的な理由のために、戦略的に必須の満州をはるかに超えて、恥知らずにも中国全土にわたる広大な土地を手中に収める。バイウォーターは言う、日本は部分的とはいえ、アメリカの侵略からその国益を守るために戦争を始めるのだと。同時に、バイウォーターのアメリカは、中国の慈善的な守護神であり、粗野で卑しい経済的、政治的な思惑に汚されていない。バイウォーターは、読者はアメリカそして同様にヨーロッパの植民地主義国家と共産主義国家ロシアは中国全土に経済的政治的権益を持っていたことを忘れてはいる。実際、主流派の歴史家達は、尤もしく熱心に言いふらす。アメリカの最も偉大な大統領フランクリン・ディラノ・ルーズベルトの祖父は、一族の富を中国におけるアヘン取引でなしたのだと<sup>5</sup>。

バイウォーターの日本が戦争に至った二番目の理由は、日本政府が日本の「労働者」による共産主義革命を阻止するために国民を統一しようとしたからである。バイウォーターの日本は何故か共産主義扇動家で満ちている。日本の文化とは根本的に相いれない、皇室の系統の廃止を要求する異国のイデオロギーが「国民の大部分」の思考に伝染していった。にもかかわらず、「組織化された労働力」は逮捕された共産主義者の釈放を要求し、政府が彼らの要求を拒否すれば暴動が起きる。

おかしなことに、「組織化した労働者」は「1931年1月2日に全面ストライキを宣言し…」実際、新年の最初の三日間は日本では通常祝日であり「組織労働者」は1月5日の月曜日まで待つべきであった。

いずれにせよ、暴動が首都全域で発生し、軍隊（いくつかの部隊は市民に向かって撃つことをためらい、反乱すら起きた！）に鎮圧のための動員命令が出されて、結果的に数多くの革命殉死者が出る。二、三日後「川村宮首相」の暗殺が国会の廊下で企てられたが、失

---

<sup>5</sup> J・ブラッドリー。(2009年)。 *帝国の巡航。* ニューヨーク州ニューヨーク：リトルブラウン社。

敗に終わる。その晩、国内の憂慮すべき難事から国民の関心をそらすため、また「国民」を「強い外交政策」によって団結させるために内閣は秘密の計画を考案する。その政策とは、対米戦争を含む、在中国の日本の権益をアメリカから守るためのものだ。読者はまた、「統一され」かつ軍隊化された中国、財政的、軍事的にアメリカによって強化された中国は今や日本の国益にとって由々しき脅威であると知らされる。<sup>6</sup>

政府が「尻尾が犬を振る」本末転倒的策略を駆使し、国内政策の惨状から目を逸らさるために戦争を利用することは、何ともんでもないことではない。「最も偉大な大統領」のルーズベルトは、未だにこの種の指導者が使う手品の最高級の例とみなされている。<sup>7</sup> 現実社会の日本人にとって、不埒な秘密の謀略とは真逆の何かが彼らの外交政策を導いていたと言える。かくて、日本の指導部は究極的に破滅的なアメリカ相手の太平洋戦争と、維持のできない中国での地上戦へと苦難の道を辿ることになった。

非白人種、特に日本人の白人国への移民に対するバイウォーターの態度は明確ではないが、かなり近い推測ができる。カナダおよびアメリカの西海岸におけるアジア人排斥運動、米国で1907年に起きた反アジア人暴動、それに伴った「紳士協定」と1924年の移民法を考えると、バイウォーターは大部分の白人の感情、よくて不安感、悪くすると人種的ヒステリーを反映していた。

バイウォーターの描くハワイのオワフ島では、人口の約40%を占める日本からの移民が武器を取り、米国軍に立ち向かうと読者は信じさせられる。バイウォーターはその暴動は地元の日系扇動者と帝国日本政府の工作員によって始められたとほのめかす。バイウォーターの架空の戦争の中身におけるこの妄想的な日本人の描写が適切かどうかは全く不明である。その反乱は、2~3日のうちに米軍機甲部隊によって鎮圧されたが、その後の日本によるハワイ諸島の侵略については記述がない。たとえバイウォーターが描く日本軍がハ

---

<sup>6</sup> 実際、中国国民党軍は政府によって武装された山賊（「バッタ部隊」）に過ぎず、アメリカの財政的援助にもかかわらず、そのままであった。たとえ高官将校を歩兵から抜擢した後に何かが残ったとしても。J.ブラッドリー（2015年）。『幻影の中国』。ニューヨーク州ニューヨーク：リトルブラウン社。A.C.ウエッドマイヤー（1958年）。『ウェッドマイヤー報告！』。ニューヨーク州ニューヨーク：ホルト社。

<sup>7</sup> 「アメリカ合衆国とヨーロッパでの戦争への道」C.C.タンシル『絶え間ない平和のための絶え間ない戦争』。H.E.バーンズ編。1953年。インディアナ州コールドウェル：キャクストン印刷社。FDRのニューディール政策はいくつかの場合において恐慌にあえいでいた米国経済を更に悪化させた。J.T.フリン（1948年）。『ルーズベルト大統領』。デビンアデア社：ニューヨーク州ニューヨーク。

ワイを占領したとしても、ハワイ諸島は日本本土からはあまりにも遠いので、補給（ハワイは完全に燃料と食料を輸入に依存している）は不可能であり、究極的には日本軍の大きな戦術の失敗となっていたんだろう。

日本人が凶暴に反乱する様子を描写するバイウォーターの真の理由は、アメリカ国内の日本人（彼は米国民と非国民の区別をしていない）をどのように処遇するかについて、提案することであった。例えば、彼らを「まとめて」米国本土へ送還するか、彼らを「ニイファ（原文）島の強制収容所」に入れるか。バイウォーターが挙げた最終的な選択は、「地元の役人達」に気に入られている日本人をそのままにしておくことである。事実、これは実際の選択であり、第二次大戦の前も大戦中も日本人が先導した武装蜂起はハワイでは起きなかった。しかしながら、テクノスリラーの指示を受けるまでもなく、フランクリン・ルーズベルト政権は、1942年、「戦時移住局」を設立し、すべての日本人を米国西海岸から強制的に移動させた。